

# 令和3年度 家庭部会研究計画

## 1 研究主題

自らよりよい生活を創り出そうとする子供の育成

—学びの質を高める家庭科学習—

## 2 研究主題設定の理由

これからの時代を生きる子供たちの社会は、一層グローバル化や少子高齢化、高度情報化などが進むことにより、社会構造は大きく、急速に変化し、予測が困難な時代を迎えるであろう。加速度的に変化する社会において、子供たちには、社会の急激な変化に主体的に対応する力を身に付けることや、よりよい社会と幸福な人生の創り手となることが期待される。学校教育においては、子供たちが、学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解すると共に、変化に対応し、新たな価値を創造できる力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするために、「学び」の質を一層高める授業改善を進めていくことが必要である。こうした中、家庭科では、実践的・体験的な学習活動を通して、家族や家庭生活、衣食住の生活、消費生活や環境などについての科学的な理解を図り、それらに係る技能を身に付けるとともに、生活の中から問題を見いだして課題を設定し、それを解決する力や、よりよい生活の実現に向けて生活を工夫し創造しようとする態度等を育成することを目指している。

生活をよりよくしようと工夫する資質・能力は、「生活の営みに係る見方・考え方」を働かせながら、日常生活の様々な問題の中から課題を設定し、解決方法を検討し、計画、実践、評価・改善する過程の中で高まると考えられる。日々繰り返し営まれる家庭生活の中で、家族と共に成長していることを自覚し、生活の営みを大切にしようとする意欲や態度は、生涯にわたる家庭生活を支える基盤となるものである。

このように、家庭科で身に付けた力を家庭、地域から最終的に社会へとつなげ、社会を生き抜く力としていくことが大切であると考え、研究主題を「自らよりよい生活を創り出そうとする子供の育成」とし、副主題を「学びの質を高める家庭科学習」と設定した。

## 3 研究主題・副主題について

### (1) 「自らよりよい生活を創り出そうとする子供」とは

「自らよりよい生活を創り出そうとする子供」とは、既習の知識及び技能や生活経験を基に問題を見だし、課題を設定し、解決する力を身に付け、主体的に実生活に生かそうとする子供のことである。家庭科では、家族や家庭生活、衣食住の生活、消費生活や環境などに関する知識及び技能を身に付け、日常生活の様々な問題を見だし、解決すべき課題を設定する。しかし、日常生活に特に不便や不十分さを感じることなく過ごしている子供たちが、自分のこととして問題を見出すことは容易ではない。そのため、既習の知識及び技能や生活経験を基に自分の日常生活を改めて見つめることができるようにすることで、疑問や発見が生まれ、「なぜそれをするのか」、「なぜそのような方法で行っているのか」などの課題を設定できるようにする。このことにより、子供たちの学習意欲が高まり、見通しをもって、主体的に学習に取り組もうとする態度を育むことにつながると考える。そして、自分の生活経験と関連付けながら、様々な解決方法を考えたり、実践活動を評価・改善したりする中で、課題を解決する。その際には、他者と意見交流しながら、自分の考えの理由や根拠を明確にしたり、考えを広げ、深めたりする。このような学習を繰り返すことで、生活の営みを大切にしようとする意欲や態度が生まれ、さらには、生活の営みには家族を支えるという大切な意味があることに気付き、生涯にわたって健康で豊かな生活を送ることができると思う。

### (2) 「学びの質を高める家庭科学習」とは

「学びの質を高める家庭科学習」とは、習得・活用・探究という学びの過程の中で「生活の営みに係る見方・考え方」を働かせながら、より質の高い深い学びにつなげる学習のことである。「見方・考え方」は、「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」というその教科等ならではの物事を捉える視点や考え方である。教科等の学習と社会をつなぐものであることから、子供たちが、学習や人生において「見方・考え方」を自在に働かせることができるようにすることが重要である。家庭科が学習対象としていいる家族や家庭生活、衣食住の生活、消費生活や環境などに係る生活事象を、協力・協働、健康・快適・安全、生活文化の継承・創造、持続可能な社会の構築等の視点で捉え、それらを一連の問題解決的な学習過程の中で働かせながら、課題解決に向けて自分なりに考え、表現するなどして生活をよりよくしようと工夫する資質・能力を身に付けていく。このような学びを通して、日常生活に必要な事実的な知識が概念化されて質的に高まったり、技能の定着が図られたりして、生活をよりよくしようと工夫する資質・能力が育まれる。

## 4 研究内容

### (1) 指導計画の工夫

#### ① 2学年間を見通した年間指導計画

2学年間の学習の見通しをもち、子供や学校、地域の実態に応じて、家庭科で育みたい子供の姿を明確にする。学習内容の関連性や系統性を考えて段階的に題材配列を工夫する。B(2)「調理の基礎」及びB(5)「生活を豊かにするための布を用いた製作」については、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に定着させるため、2学年にわたって扱うようにする。その際、簡単なものから複雑なものへと次第に発展していくよう配列する。家庭や地域での実践についても、学校行事や地域等との関連を考えたり、長期休業等を活用したりするなど題材の配列に配慮する。「A家族・家庭生活」の(4)「家族・家庭生活についての課題と実践」では、「(2)家庭生活と仕事」又は「(3)家族や地域の人々との関わり」を基礎とし、「B衣食住の生活」、「C消費生活・環境」で学習した内容との関連を図り、2学年間で一つ又は二つの課題を設定して年間計画に位置付ける。

#### ② 育成する資質・能力を明確にした題材構成

題材については、「生活の営みに係る見方・考え方」を働かせ、子供たちが設定した生活の課題を実践的・体験的な活動を通して、解決していく学習を積み重ねていけるように構成する。その際「生活の営みに係る見方・考え方」に示される視点を適切に定め、見通しをもって指導できるようにする。「A家族・家庭生活」から「C消費生活・環境」までの各内容項目や指導事項の相互の関連を図ったり、内容AからCまでの各項目で身に付けた「知識及び技能」を活用し、「思考力・判断力・表現力等」を育み、家庭や地域での実践につなげることができるよう一連の学習過程に位置付けたりして、題材を構成する。また、子供たちの課題追究の意識の流れを明確にするために、題材構想図を作成する。そして、その題材で育成する資質・能力を明確にし、題材全体を貫く課題を設定する。これにより、その題材で子供たちに「何をどのように学ばせるか」、「何ができるようになるか」が明確になり、生活をよりよくしようと工夫する資質・能力の育成を図ることができる。と考える。

#### ③ 家庭や地域との連携を見据えた人材や教材の開発

子供たちが学習したことを家庭生活で継続して実践できるようにするためには、家庭との連携が大切である。家庭でのインタビューや実践は、家庭における新たな課題発見や、家族の一員として自分が成長していることの自覚を促し、生活を大切にしようとする意欲や態度を育成する。また、家庭科通信や実践カードなどにより、家庭科の学習のねらいや内容について、家庭に情報を提供することが、家庭科学習の意義について理解を深めることにつながり、家族の協力のもと、効果的に学習を進めることができる。

さらに、幼児又は低学年の児童や高齢者など異なる世代の人々に関わる活動等も考えられることから、教育活動に必要な人的又は物的な支援体制を地域の人々の協力を得ながら整えるなど、地域との連携を図る必要がある。例えば、生活文化の大切さを伝える活動などにおいては、地域の高齢者をゲストティーチ

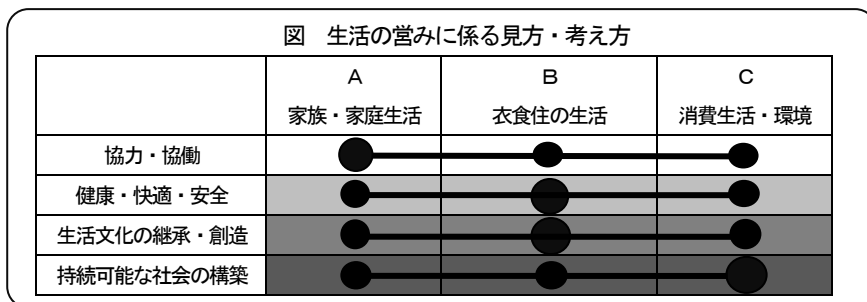
ヤーとし、生活の工夫について調べたり、教わったりすることが考えられる。特に「A家族・家庭生活」の(4)「家族・家庭生活についての課題と実践」においては、家庭や地域と積極的に連携を図り、学習を効果的に進めることができるようにする。

④ 他教科等との関連、中学校との系統性の明確化

家庭科と他教科等との関連を明確にするとともに、中学校の技術・家庭科(家庭分野)の内容を見据え、系統的に指導できるよう、教科等横断的な視点で題材配列や題材構成を工夫する。これにより、子供たちがこれまでに学習してきた内容とこれから中学校で学習する内容の関連を意識することで、子供の理解の程度や思考の流れを予想するなど、見通しをもって指導計画を考えることができる。

(2) 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善

授業改善は、子供の資質・能力を育むためのものであることから、まず題材でどのような資質・能力を育むかを明確にする。また、以下の三つの学びは、学習過程において相互に関連し合い、一体として実現されるものであるが、それぞれについての授業改善の視点を示す。「主体的な学び」とは、題材を通して見通しをもち、日常生活の課題の発見や解決に取り組んだり、実践を振り返って新たな課題を見付け、主体的に取り組んだりする態度を育む学びである。「対話的な学び」とは、子供同士で協働したり、意見を共有して互いの考えを深めたり、家族や身近な人々などとの会話を通して考えを明確にしたりするなど、自らの考えを広げ深める学びである。「深い学び」とは、日常生活の中から課題を設定し、その解決に向けて計画、実践、評価・改善といった一連の学習過程の中で、「生活の営みに係る見方・考え方」を働かせながら、課題の解決に向けて自分なりに考え、表現するなどして資質・能力を身に付ける学びである。



(出典：H28 教育課程部会  
家庭、技術・家庭ワーキング  
グループにおける審議の  
取りまとめ)

「生活の営みに係る見方・考え方」については、「A家族・家庭生活」の(1)のガイダンスで扱う。各内容の導入で、ガイダンスで触れた「見方・考え方」を振り返り、視点を意識できるようにする。「食事の役割」、「衣服の主な働き」、「消費者の役割」などの役割や働きについて、導入で学習するので、「食事の役割」では「健康」、「衣服の主な働き」では「快適」などの視点を主に意識できるように学習を展開する。題材全体を貫く課題は、導入の1又は2時間目に子供と教師が設定するが、例えば、「健康で元気になるにはどのような食事をとればよいか」という課題を設定する。子供たちは、その課題解決のために「生活の営みに係る見方・考え方」である「健康」の視点から日常生活を見つめる。そして一連の学習過程の中で、自分の生活経験や学んだ知識(事実的な知識)を関連付けて考え、理解を深めていく。このような学びを通して、本質的な「健康」という概念が習得され質的に高まったり、技能の定着が図られたりする。

① 基礎的・基本的な知識及び技能の確実な定着

題材ごとに、発達段階に応じた基礎的・基本的な知識及び技能を明確にする。子供たちには、これまでに「知っていること」や生活経験と結び付けて、学習内容への興味をもたせる。さらに試行錯誤する活動や観察、調査、実験等の活動を通して実感を伴って理解できるよう工夫する。また、調理や製作等の手順の根拠について考えることにより、科学的な理解にもつなげる。例えば、みそ汁の調理で「なぜ材料をこの順番で入れるのだろうか」ということを、実習を通して理解し他の材料や料理に応用できるようにしたり、ボタンの付け方で「ボタンと布の間に2～3回糸を巻くのはなぜだろうか」と観察して理解できるようにしたりする。このように実践的・体験的な活動を通して、確かな知識及び技能の習得を図る。また、製作物の見本、段階見本、試行用の教材、ICTなどを活用した教材・教具等、子供が活用できるように学習環

境を整備する。さらに、子供の特性や生活体験を把握し、ティームティーチングや少人数指導を取り入れ学習形態を工夫したり、支援体制を整えたりして、個に応じた指導の充実を図る。

## ② 問題解決的な学習過程の工夫

とらえる	見通す	確かめる	振り返る	生かす
生活の課題発見	解決方法の検討と計画	課題解決に向けた実践活動	実践活動の評価・改善	家庭・地域での実践
既習の知識及び技能や生活経験を基に生活を見つめ、生活の中から問題を見だし、解決すべき課題を設定する	・生活に関わる知識及び技能を習得し、解決方法を検討する ・解決の見通しをもち計画を立てる	生活に関わる知識及び技能を活用して、調理・製作等の実習や調査、交流活動を行う	・実践した結果を評価する ・結果を発表し、改善策を検討する	改善策を家庭・地域で実践する

上記の学習過程は例示であり、題材ごとに学びの質を高めることができるよう学習過程を設定する。また、2学年間を見通して、このような学習過程を工夫した題材を計画的に配列し、課題を解決する力を養うことが大切である。

## ③ 言語活動の充実

調理や製作等における体験を通して、言語活動を充実させることができるようにする。例えば、「確かめる」では、試行錯誤する活動や実験・実習等を協働して行い、その結果をグループで話し合うことにより、自分の考えと友達の考えの共通点や相違点を見付け、より深く考える。その際、考えを言葉や図表等にまとめ、ICTを活用し、互いの考えを可視化して比較できるように工夫する。また、家庭科で用いる生活に関連の深い様々な言葉が、実感を伴った明確な概念として形作られるように配慮する。このような活動を通して、身近な生活への理解が深まるとともに、学んだことを活用する能力を身に付けることができ、生活をよりよくしようと工夫する実践的な態度を育むことができる。

## (3) 学びの質を高める評価の工夫

「子供にどういった力が身に付いたか」という学習の成果を的確に捉え、子供自身が自らの学習を振り返って、次の学習に向かうことができるようにするとともに、教師が学習指導の在り方を見直すことや個に応じた指導の充実を図ることは重要である。さらに、指導と評価の一体化は「カリキュラム・マネジメント」や「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善において、重要な役割を果たすものであり、指導に生かす評価のしかたを工夫するために、指導と評価の計画を作成する。指導と評価の計画に基づき、三つの観点において学習活動に即して評価場面や評価方法を明確にし、学習の過程や成果を適切な場面で多面的、多角的な方法で評価する。例えば、「知識・技能」では、事実的な知識の習得と知識の概念的な理解をワークシートや作品等から評価する。「思考・判断・表現」では、論述やレポートの作成、調理や製作計画・実践記録表、グループでの話し合い等から評価する。「主体的に学習に取り組む態度」では、ノートやレポート等における記述、ポートフォリオや行動観察、自己評価や相互評価等から評価する。また、「生活の営みに係る見方・考え方」を働かせているかについては、子供がどのような言葉を使い、どのような意味で表現しているかを聞き取ったり、書かせたりする場面が考えられる。

### 【引用・参考資料】

文部科学省	「小学校学習指導要領（平成29年度告示）解説 家庭編」	平成29年7月
文部科学省	「小学校学習指導要領（平成29年度告示）解説 総則編」	平成29年7月
文部科学省	国立教育政策研究所 教育課程研究センター	
	「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料	令和2年3月
株式会社ぎょうせい	「平成29年改訂 小学校教育課程実践講座」	2017年12月
株式会社東洋館出版社	「小学校家庭科 資質・能力を育む学習指導と評価の工夫」	2020年10月

